――明治 10 年創業という長い伝統とノウハウをもつ花友グループの「花友アネックス」社長千葉礼子さんと専務柴田久男さんに、花屋さんから見た学芸の森についてお話を伺いました。

先ほど学内を回って樹木の様子を見ました。サクラやマツやケヤキなど年代の経っているよい樹木もありますが、それらの木が喜んでいるかというと、そうでないものが多いですね。低木などはその下で乱雑に生えていますし、現状を見る限りではコンセプトが無かったように思います。理路整然とするのもよろしくないが、ストーリー性あるコンセプトは大切です。限られた予算の中でやるのは大変かもしれませんが、できるところからコンセプトをもって植栽をすればよいのではないでしょうか。

森作りには最低 10 年、12 年先のことを考えて行う必要があります。そのためには、よほど強いコンセプトがないとやっていけないでしょう。つまり何が必要かを訴える強いコンセプトが一番大切ですね。全体的にやろうとせずに、少しずつでよいからできることを重ねてやっていく姿勢が必要でしょう。また、種蒔きなど、小さなことでよいから、附属の小学生にやらせるなど、子どものうちから、土と植物にふれ合う体験をさせることも必要でしょう。狭いエリアから初めて、そのうちだんだんと広いエリアに拡大するのがよいいと思います。

高木や建物であまり陽が当たらない場所もあります。日本の庭園では陽の当たらない場所では、昔からコケと岩と石で作る侘び寂びの庭園を作っていましたが、ゾーンごとに工夫をすることも大切でしょう。また、ゾーンごとに名前を付けてコンセプトをわかりやすく示すと共に、親しみを持てるようにすることもよいことだと思います。

学内で一番気になるところは、誰もが正門から入った時に真っ先に目につく、左側のエリア（20 周年記念会館前）や、正面のケヤキ林の景観でしょう。ケヤキの前に合格発表用の掲示板がありますが、きれいなケヤキの樹形が隠されてしまっています。また、その前に置かれたフラワーポットも自然な感じではありません。これは置くことで、かえって不自然さを作ってしまっています。学内にやってきた人が、林の中に自然な感じで入れるようなコンセプトのある森作りをされてはいかがでしょうか。例えば、ケヤキ林の前の違和感のある掲示板をなくし、その先に、ケヤキの林の中に入っていく魅力ある小径があると、人は皆そこを通りたくなります。また、人は、アスファルトの中を通って帰るより、土と木の中を帰りたいものなのです。以前、私どもの会社で赤坂にあるホテルの２階の外側の通りをイペ材によるウッドデッキにすることを提案したことがありますが、これは施工後大変評判がよかった。かつて人があまり通らなかった冷たいコンクリートの道に、現在では多くの人が通行するようになりました。これなどは木が人を惹きつけるよい例でしょう。

植木の専門家が設計すると、時として画一的なものとなってしまいますが、私達は花屋ですので、植木屋さんとは違った感覚でものを見ています。学芸の森がよい森になるるために何かお役に立てればと思います。